

# イン・ディス・ワールドの政治学\*<sup>1</sup>

— 現実／イメージ／公共性 —

田村元彦

「ほどらひといふことが ござる  
ひとを好くにしても、憎むにも  
またせるにしても、待つにしても」  
(金子光晴「ほどらひ」)

## 00 徘徊するイメージ

忌まわしい\*<sup>2</sup>、としか言いようのないイメージが外部からもたらされ、徘徊している\*<sup>3</sup>。まさしくグローバリズムの罪と汚辱を一身に背負わされ、命乞いを強制され、不条理にも星条旗を身にまとわされ、「未来ある／未来のない若者 (=無職・フリーター)」あるいは「キリスト教／非キリスト教」\*<sup>4</sup>などの分断線に引き裂かれた青年のイメージ\*<sup>5</sup>。携帯電話等で転送を繰り返された彼が殺害される瞬間の映像を目にした多くの(彼と同じ)「日本人」の若者は、どのような感情を抱いたのであろうか。また彼の家族やメディアの振る舞いは、前回の人質事件でのパッシング騒ぎなどによって「過剰に」学習されたものであった(「自衛隊撤退」や「自己責任」という言葉の過剰な抑制)。被害者やその家族に押し付けられるイメージは、通例では「イノセント」が過剰に演出されることで、メディアにおいて流通・消費しやすいものとなる。しかし、そうした演出が帰結するのは、「イノセント」の両義性によって、ある時は、この世界に偏在する「悪意」の存在が強調されることで「思慮の足りなさ」を指弾(パッシング)され(これまで性暴力や日本軍性奴隷などの被害者たちに投げ

八八

つけられた「心ない」言葉が想起されよう)、またある時には、「罪なき」者として歯止めのないままに関心と憐憫の対象とされてしまうという事態である\*<sup>6</sup>。

こうした非対称性に被害者(あるいはその関係者)の生が翻弄されてしまうのは、この世界において(In This World)現実起きてしまった事実の「取り返しのつかなさ」を社会が忘却するための、ある種の儀礼的な機序が与える効果の一つにすぎないのだろうか。青年の死体からはじまって、それを言葉の儀式で幾重に覆い、悲嘆→思い出話→甘美な記憶→緩やかな忘却へと進行させる、そうした機序の切実さ(あるいは合理性)を暗黙裡に共有することで、われわれはある種の共犯関係(=負の共同性)をとり結んでいる。実際に、日本におけるこうした負の共同性は、二つの一見正反するベクトル(極端な虚構化/リアルめいたものへの逃避)に引き裂かれている\*<sup>7</sup>。「一方には、危険性や他者性を除去し、現実を、コーティングされた虚構のようなものに転換しようとする執拗な挑戦がある。他方には、激しく暴力的で、地獄のような「現実」への欲望が、いたるところに噴出している\*<sup>8</sup>。この社会が大きな転換期にあることは、誰もが十分に理解しているし、ある面では過剰に適応しようとしてきている。しかしこうした一見矛盾する「現実」への対処法には、以下に述べるように、きわめて重大な政治的含意がともなっている。

## 01 あなたがいても、いなくても

A little love and affection  
In everything you do  
Will make the world a better place  
With or without you —— Neil Young\*<sup>9</sup>

八七 かの青年が殺害される少し前の2004年7月に、私(田村)は参院選の結果に関連させて、次のような文章を公表していた。

≪何となくスカッとしない、中途半端な感触が残った選挙結果だった。選挙速報において「民主大躍進・自民苦戦」の見出しに解釈を一義的に押しこめようとメディアは躍起になっていたものの、特に民主党に投票した人びとは、当面は勝ち負けが確定されることなく幕引きされそうな気配に軽い失望を感じているに違いない。また選挙直前の支持率の急降下に相当な危機感を抱き、選挙向けのカードを切りまくってしぶとく巻き返した自民党においても、小泉マジックの失効を露呈させてしまったことで、今後の政局や選挙に対する不安材料しか見いだせないのが実情だろう。こうした結果については、有権者の絶妙なバランス感覚のあらわれと肯定的に評価する向きもあるが、私見ながら、長期間にわたり漠然とした不安の対象で制御困難なく妖怪>だった無党派層が、自民対民主という二大政党の枠組みにほぼ囲い込まれてしまったと表現することもできるのではないか。

少し迂回しつつ話を進めてみよう。投票を終えた後、公開中の映画『69 sixty nine』をみた。私（田村）は一九六九年生まれなのだが、その映画はその年の長崎県佐世保市を舞台にした村上龍の原作を、新鋭監督の李相日が映画化したものである。第一作の『青 chong』以来、閉塞した「学校」空間を逸脱し疾走する身体を一貫して描いている李監督らしく、デタラメさが横溢した魅力的な映像だった。また現実の「取り返しのかなさ」を忘却させてくれる映画という装置のもつ機能をあらためて確認しつつ、現在使われている意味での「無党派」層の原型が誕生したのが一九六九年だったという研究者による指摘を、私は感慨をもって想起していた。

実際、翌一九七〇年の大阪万博の「お祭り広場」のデザインについて、建築家の磯崎新は、その中で大騒ぎができるような「アナーキーな群集を受け入れる場」を公共空間として成立させることを企図していたと自ら証言している。それから三十年以上を経て無党派層という<妖怪>は、敵失や説明責任などのポイントの多寡を競い合う政権交代ゲームに享楽の場を見いだしたようだ。しかしながら、世界の多様な生とデタラメに交錯してしまう『69』の高校生たちのような身体に対して、われわれの社会はいまだに関心を向けてはいない。

例えば、福岡市のホームレス支援団体による夜の炊き出しに教え子の女子学生を引率したところ、彼女はお茶を渡したときのお礼の言葉や、交わした話の内容、その場の光景などが鮮明に記憶に残っていると私に語ってくれた。社会に広く認められているとはいいがたい支援活動におけるホームレスの人のびととの個別の出会い。その中で自分の行為や言葉が他人との関係のなかで多様な生の実相を形づくっているというリアリティーは、対話のなかで問題へのスタンスを確定し、解決の手段を吟味していくことを各人に要請するだろう。当然のことながら、そうした試行錯誤の時間と空間がきちんと確保され、経験が豊富になってこそ、個々の局面での選択や優先順位づけができるようになるのである。(近年のマニフェスト選挙にみられるように) 選択の可能性を演出したり多くの論点を列挙したところで、個々人の多様な生の実相と切り結ぶことはできないのである。

小泉改革の三年間で浮かび上がってきたのは、二大政党という枠組みによって見えなくなったもの、従来は歴史的な経験にもとづく運動圏の共通理解に支えられてきたためにうまく言説化されえずにきた各地域ごとの平和共存の思いなど、ワンフレーズでは語りえないものへの配慮こそが社会の不安を克服する唯一の道だということである。今回の参院選の投票率はやはりかなり低いものであった。いまだ声にならない初発の声がたしかに存在していることを意識し続ける意志を表明し続けること。これは政治家のみならず、社会を構成するわれわれ自身の課題でもある。≫<sup>\*10</sup>

二大政党制という枠組みは、一見、リベラルかつ多文化主義的な「諸規範・諸文化が葛藤を孕まずに共存しうる空間」であり、こうした「虚構化」に照準すれば、結局のところ<政治>は「異なる生活様式、異なる利害の間の行政的な調整の問題に転ずる」<sup>\*11</sup>ことになる。しかしながら、それに(戦略的な含意で)対置しておいたホームレスとの出会いと気づきもまた、「生き生きとしたもの」の回復という初志(動機づけ)が裏切られ、(暴力やテロの温床となりうる)社会的現実への無力感の醸成に帰結しがちである<sup>\*12</sup>。すなわち、この二つのベクトルから失われているのは、「われわれにとって可能なるものの枠組

みを確定する決定的な選択」<sup>\*13</sup>という意味での〈政治〉なのである。

われわれの生を規定している枠組みは、そうした〈政治〉への初志を調達するはずの他者との多様な関係性の備給源としては枯渇し切ったものであり、それどころか、われわれの自己イメージの制御でさえ保証するものでない<sup>\*14</sup>。これは一面では、現代日本の「公」秩序を形成する際に、ポツダム宣言に従って「イノセントな日本人」と自らを定義して、よき「戦後民主主義」というイノセント・ワールドを建設するという構図を捏造したことに由来している。実際、そのような「虚構」は破綻をきたさざるをえず、直接間接に戦争に加担・協力した者たちは、「こっそりと自分の暗部を隠し、それを象徴的な経路で(?)「昭和天皇」という暗渠に投げ込んだ」<sup>\*15</sup>。その結果、昭和天皇が「日本人は本当のところどう生きたか」(という来歴)を一手に引き受ける存在として敬慕とタブーの対象であったように、現代日本の「公」秩序には、戦後日本人が押し隠してきた「本当のこと」の暗渠が隠匿され続けているのである<sup>\*16</sup>。

われわれはこうした暗渠の作用を正確に抉り出し、これと直接的に対峙して政治的な認識や実践に接続させねばならないが、このことは「本当のこと」を真/偽や正/邪などの二分法で裁く(片付ける)ことを目指すものではない。負の共同性には必ず「負い目」や「やましさ」がつきまとい、市場への依存が全面化して自らで生きる(何かをなしうる)という意味での自己コントロールの感覚を喪失することでもたらされる不安が、何らかの存在(漠然とした他者)に「生かされている」という道徳的な語彙に心理学的な経路で置き換えられ、それらが強迫観念的に反復されることで内面化してしまう<sup>\*17</sup>。一種「多幸症」的な社会の根底にあり、間歇的に噴出する不全感やルサンチマンは、ここ数年の日本社会の世論の動態が証していると言えよう<sup>\*18</sup>。だからといって、そうした「負い目」や「やましさ」を安易に解消できる方法はないことは断言できる。〈政治〉というものと否応なく関わらざるをえない、言い換えれば、何らかのかたちで「決定的な選択」をする必要があるわれわれは、その選択の前提として、自分たちは絶対に間違っていないと考えるか、できるかぎりの努力はしたが、自分たちは間違っている(見誤っている)かもしれないという意識を片隅にでも持って臨むかで、結果は自ずと違ってくるはずである。政治的な選

扱はその各局面において、当然のことながら、欧化／土着、破壊／創造、連続／断絶にまたがる両義性をはらむものであり、その両義性が両義性として表現されないまま、「表層の意匠を変える技術」のみが洗練され、変化が反復に置き換えられ、その反復の中で閉じた自由（＝自由の封鎖への逆接）が謳歌されている<sup>\*19</sup>。「すべての信頼関係は、目の前にいる相手のことを「自分はわかっていない。でもわかりたい」という気持ちをお互いが共有し続けることでしか保たれない。その緊張を忘れ、相手のことをすべてお見通しとわかったつもりになった瞬間、関係の崩壊は始まる」<sup>\*20</sup>。両義性とは、「あれもこれも」と欲張ったり、それとは反対に、「あれかこれか」と二者択一を性急に迫るものではないはずである。

対等の個人（という擬制）を前提にした被害／加害の相互性が崩壊しつつあり、またさまざまなリスクの制御が社会的課題になりつつある現在においては、逆に、他人の助けなしには生きてはいけない人間存在の「負い目」や「やましさ」につけこんで、道徳的命法で動員や参加に駆りたてたり、自立へと追いやったりしないしないための社会技術が必要とされている<sup>\*21</sup>。繰り返す述べるならば、「一人ひとりが成長するための当たり前のことを、日々着実に実行しようとしている」<sup>\*22</sup>という振る舞いが失われてしまった、この世界に忌まわしいイメージが（幽霊のごとく）徘徊しているのである。しかし、ここで確認しておかなければならないのは、ラカンが倫理に関するセミナーで使用した<リアル>とは「隣人」のことであり、「隣人」は確かに存在する<sup>\*23</sup>。さらにジジエクにならうならば、<リアル>は「不可能なもの」ではなく、遭遇し損ねた（出会い損ねた）という点からすれば単なる不可能ではない。「遭遇」と「気づき」には時差（ギャップ＝裂け目）があり、個々人の生の時空は、「気づかなかった」ことを「気づく」こと、すなわち「後一悔」の念で満ちている。そうした出会い損ねと出会っている、という「不可能性」の身振りこそが、現実

「急速に進行するグローバル化にともない、ますますもって多文化主義や他者への寛容が議論されるなか、皮肉にもしばしば浮き彫りにされるのは、他

者とどのように接触なしに接触するか、ということだ。ジジェクによれば、隣人への愛といった寛容に関する説教は、隣人との遭遇を避ける究極の戦略である。寛容とハラスメントの究極の論理は、「私は一人になりたい」ということで、……」\*24

錯乱している訳でも、号泣や絶叫する訳でもない、憔悴し落ち窪んだ眼窩の影によぎる、青年の声なき声。われわれはもうすでに一線を踏み越えたのだ。「世間」や「世論」なるものを代弁する（と称する）常識的言辞や道徳的断罪が、個別のイメージと現実（あるいはその政治的含意）をわかりやすくつなぐために行使され、既視感で塗りこめられたコメントのみが氾濫するなかで、「切り捨て（られ）てよい」という重大な政治的判断が、しかも真剣な議論の偽装さえなされないまま合意されてしまったのだから。あの忌まわしいイメージの背後に、真正な奥行きをもった想像力を到来させることは果たして可能なのか。制御不能な両義性をはらむ忌まわしいイメージは、表向きには公共空間から削除され、「罪なき」若者というイメージに速やかに漂白・復元され、幻想的な物語に囲い込むことですでに追悼＝忘却が終了されようとしている。こうした「囲い込み」は、戦後日本においても局所的に行使され続けてきたきわめて恣意的かつ非対称な分断の力学の帰結、あるいは日本的「おほやけ構造」の機序なのであろうか\*25。

## 02 別の誰かに向かって

«「川が見えるか？」

「もちろん」

「患者を閉じ込めてる」»\*26

幾人かの論者が繰り返し指摘しているように、N. ルーマンのコミュニケーション理論は、基本的に「接続不安」（コミュニケーションの不確実性への所

作)を分節化したものであり、これは単に意図伝達の不安定さ、ひいてはコミュニケーションの不可能(というある種の経験論)を意味するものではない。実際にルーマンは、コミュニケーションに関わる不確かさを精緻に析出しつつも、「にもかかわらず」コミュニケーションが成立してしまっているのは何故か、という問いを立てることで、「コミュニケーションの危うくなる地点に立ち現われ」<sup>\*27</sup>、不確か性が確実性へと変換していくメカニズムに着目し、あまりに有名な「メディア (Medien)」概念を提出している。われわれの日々の現実、他者との折衝の中で社会的存在として生き、さまざまな問題が現実化され、あるいは否認されるという、言わば平凡な繰り返しにすぎない。この平凡な繰り返しが巨大な社会を構成しているという(それ自体驚嘆に値する)現実を「あたかも偵察衛星からの視点のよう」な視線で、「ありそうにもないこと」(Unwahrscheinlichなもの)として見ることから社会システム論は出発しているのである<sup>\*28</sup>。

通常われわれが有する社会的知識は、諸々の「区別 Unterscheidung」(例えば、男/女、同国人/外国人、健常者/障害者、好き/嫌いなど)を行使して外界を構成することで獲得されたものであるが、(コミュニケーションの不確か性によって「接続不安」が必然的に導入されることで)その都度(ad hocに)新たな現実が構成されていく。しかしながら、こうして構成される社会システム(ルーマンによれば、コミュニケーションそれ自身が「観察者 Beobachter」であるのだが)には、その認知の対象となりえない盲点があり、それはすでに述べたような構成の前提となる「区別」それ自身なのである。すなわち、ルーマンがハーバーマスの「生活世界」などを想定して「存在論 Ontologie」と呼んで峻拒したように、通常は「観察者」と独立した一義的な現実が別個に存在し、それについて客観的描写がなされるものと素朴に考えられがちなのだが、現実それ自体がコミュニケーションのネットワークの中で構成されたものなのである。ドキュメンタリストなどが指摘しているように、「現実の歪曲」という議論は俗耳に入りやすいがきわめてナイーブであって、コミュニケーションから独立した現実認識不可能である<sup>\*29</sup>。保阪正康がいわゆる「大本営発表」を分析して批判しているように、「客観的事実」を見ることなしに現実を糊塗

しようとした戦況報告が、情報の「囲い込み」と「一方的押しつけ」という形態において構成され、権力そのものとして機能したことなどが、その好例であろう<sup>\*30</sup>。東條英機がつくった国民囲い込みの「外壁」は、客観的には「嘘」で固めた情報空間を、「正確無比」「真実」の空間として（「嘘」の共有を）強制することで、「正確な情報がふんだんに流れているのであり、それを信じない国民の存在は許されない」<sup>\*31</sup>という意味となったのである。

戦時中の日本のごとく「本当のこと＝嘘」としてその共有を強制されることは、人間的な退廃をもたらすのは必然である。しかし、いかに他のイメージ（像）との競争において「真の」イメージへの近接の優位（騙されまい！）を誇ったところで、そのイメージ自身もその根本において社会的に構成されたものであることには変わりはなく、何らかの意味での「盲点」が不可避に付随する<sup>\*32</sup>。例えば、2004年の夏の最中（8月13日）に沖縄国際大学のキャンパスへの米軍ヘリ墜落事故が起きた後の10月16日、町村信孝外相が宜野湾市の事故現場を視察した後に、記者団に対して、「被害が重大にならなかったのは（米乗員の）操縦技術も上手だったと思うが、よく最小被害にとどまった」と感想を述べている。事故直後にも在日米軍関係者が同様の感想を述べて地元が反発したこともあり、同日夕刻の会見で町村外相は自らの発言について、「操縦士の技術レベルも分からないで言ったのは不適切だった」と陳謝している。しかし、彼にそのような感想をもたらしたのは、「多分、技術的なものがあったのかもしれないあと、素人考えで言ったまでだ。事故現場に行ってそういう印象を持った」という「現場」の（彼なりの、おそらく結論が先にありきの）現実だったのである。すなわち、構成される現実とは、それ自身において絶対の根拠を持ちえず、常に制御不可能性をはらんだ「他でもありうる」現実であって、まったく恣意的というわけではない反面、客観性が確定されることもない。これは社会システム論のもつ限界、あるいは（かつてハーバースが一方的に批判したような）体制擁護イデオロギー的性格によるものではなく、この世界には複数の観察者が併存し、一義的に妥当する世界が存在しえない現実を弁えることで、あらゆる社会的に構成された知識や現実に対して批判的な立場に立ちえることの証左なのである。

「言葉の裏にあるつもりがどうであろうと、またそのつもりが意識されていようがいまいが、もの言いは常にシンプルであること。」（竹内統一郎）<sup>\*33</sup>

しかし（それ故にこそ）、「にもかかわらず」コミュニケーションなる不思議を成立させているこの世界における奇蹟について、安易な政治学的論評や軍事的分析でもなく、単なるメディア論的解釈でもない、不確実性に居直ったり、「理想的な発話行為」（完全な理解・到達・成果）を夢想して幽霊のごとき不確実性を（無いものとして）解消してしまったりすることのない所作が要請されよう<sup>\*34</sup>。たとえ個人の意識レベルで妥当性要求（真理性、正当性、誠実性）を遵守しえたとしても、コミュニケーションにまつわる時差（ギャップ＝裂け目）によって、情報／伝達の齟齬の可能性をゼロにすることはできない<sup>\*35</sup>。

さらに加えて論じておけば、先に述べたようなルーマンの「あたかも偵察衛星からの視点のよう」な視線は、いわゆる「嘘をつく権利」に関するカントの「非人間的」な見解を想起させる<sup>\*36</sup>。バンジャマン・コンスタンからの批判に対応して、カントは、「嘘は……法律家の要求するような『それが他人に危害を与えるかぎりにおいて』という追加条項を必要とはしない」（「人間愛から嘘をつく権利と称されるものについて」と述べた上で、「権利のないところに義務は生じない」とする（きわめて穏当な）コンスタンの議論に異議を唱えている。その一つは、「嘘」という概念、及びそこから導かれる因果関係についてであり、真実とは意志に依存するものではない、つまり「正直さ」（意図・意志）と言明の正しさ（あるいは誤り）との区別を強調している。それは、言明と意志の一致を目指すことと、言及する事実の關係に照準することとの区別である。二つ目は、「正直さ」と「法の支配」という社会の基盤に関わる問題との關係であるが、これは昨今のセキュリティの（法に対する）上昇をめぐる議論にも関わっている。そして最後の反論は、「例外」（の繁殖）の問題を取り扱うものであり、これは思弁的な哲学の議論に止まらず、現在の政治状況からも緊切性をもった提起である。

ここで重要なのは、カントの議論は、道徳律と「人間性」（正確には、同胞愛）とが対立する場合、道徳律に「例外」を認めてよいか、という倫理的な面

が過剰に屹立していることであるのだが、ラカンはカントのそうした「過剰さ」（「病的な動機！」）に着目して、「他人の命か／自分の命か」という倫理的（かつ政治的）選択が提示している真の問題を隠していると批判している<sup>\*37</sup>。法の遵守の背後に隠されている（他者への危害などの）意図の隠蔽（漱石の『こころ』を想起せよ！）や、義務が「出来合い」のもので言い逃れや責任転嫁が可能であるが故の＜二重の「自己欺瞞」＞（H.E.アリソン）は、義務としての倫理的行為がもつ「可能性」によって、逆説的にも倫理の主体が消去されてしまうことが最大の問題なのである。「適用」されるべき状況の個別性・特殊性・多様性のリスト（所与の選択可能性）ではなく、主体による何らかの義務の普遍化（法の確立）こそが、倫理の核心にあるのであって、主体は、「出来合い」の普遍的な法の要請・是認を受けて行為するわけではない。ラカンはカント倫理学を評価しているのは、「可能性」（できるかどうか）に照準するのではなく「不可能なもの」としての道徳を要求することで、われわれの自由の条件を伝統的倫理学から切断させて考察しようとしているからである<sup>\*38</sup>。

法（実定法）が必然的に暴力をともなった強制秩序であるのは、その根拠を自己のうちにしか持たず、その意味で無根拠だからであり、したがって自己の外部に対して、その都度、自己の起原の情景（接続不安）を再現し、暴力を侵犯者に対してふるわざるをえない<sup>\*39</sup>。「手遅れ」<sup>\*40</sup>や「裏切り」<sup>\*41</sup>は、法（の起原）や人間の生にとって不可避の条件なのである。フランス語の trahir は、「裏切る」という意味の他に、「正体をあらわす。本当のことを、言葉によってではなく、顔の表情や周囲の状況によって、示してしまう」という意味も持っている<sup>\*42</sup>。言葉は時に人を欺くものであって、その言葉が信じるに値するかどうかの最終的な判断根拠はしばしば「目」に求められ（「目」がものをいう）、それで欺かれたならば、「見る目」がなかったのだと自己了解するしかない<sup>\*43</sup>。かつて南米大陸を縦断した「名もなき」若者もまた、まだ後になって（時空を超えて）誰もがその名を知るポップ・カルチャーや革命のアイコンとしての英雄チェ・ゲバラでなかった、というシンプルな事実を注視すれば、イラクで殺害された青年が「別の誰か」に変貌する（「他でもありえた」）可能性が浮かび上がってくるだろう。個々人の生を、断片的なイメージや個人情報に切り刻むこ

となく、敢えて「取り返しのつかない」現実を手放す（＝「裏切る／裏切られる」関係を想定する）こととの引き換えに、この世界がその内部から別の様態に転覆される可能性を開くのである。

「……私はダバシに言った——「批評家だとは、気の毒に」。

「なぜだ？」

「あなたがいい人だからだ」

「いい人？ どういうことだ？」

「決して見出すことのできない真実を探し求めているからだ。『羅生門』的な錯綜した視点の中で、いつも芸術作品の本質を探しているからだ」<sup>\*44</sup>

### 03 ベストエフォート

「他の諸国でも程度の差こそあれそうなのだが、とくに米国では、公と私の二セクターの役割分担をめぐって、侃々諤々の論争が繰り返されてきた。議論はきわめて広範囲に及び、退屈な長広舌に終始することも少なくなかった。ただし、論者が無視してすまそうとするのは、唯一、現実そのものである。」  
(John Kenneth Galbraith)<sup>\*45</sup>

この世界について語ろうとする時、自由が生み出す「差異」（例えば、情報／伝達）を同一性に還元したくなる欲望が常につきまとう。「互いの意味づけを欠いたまま、バラバラにしておくのでもなく、差異性を維持しながら、あるいは差異の複数性を維持するためにこそ、共通の鞆帯、交流のための空間をいかにしてつくりあげるか」<sup>\*46</sup>というトクヴィル以来の「政治」のイメージを、  
七  
あらかじめ価値観や道徳性を共有されることを前提としない、認知的に (cognitive) に開いている社会システム論へと接続することは決して奇矯なことではないだろう。政治システムの複合性は権力というメディアを通じて、一方で縮

減されるが、また同時にその働きによって（すなわち、行為連鎖の形成による権力の連関および《ポテンシャル》の増大のために）権力のメディア機能そのものが上昇する<sup>\*47</sup>。また、選挙プログラムなどにおける選択行動において回避された選択肢は、選択されうる可能性もあったという「可能性」の提示によって、潜在的なメッセージとなりうる。多岐にわたる〈回避されるべき選択肢〉（＝「幽霊」！）という基盤の上に権力が差異化するということは、選択行動というコミュニケーションを媒介とした（「社会」の部分システムとしての）政治システムの「構造」に権力基盤が拠っていることになる。当然のことながら、ルーマンが提示している「構造」は、あらかじめ規定されたものではなく、選択行動という要素結合の形態であって、権力とは、そうした「構造」と相関し合う選択のメディアである。従って、ルーマンが企図するのは、「失われた」価値観や道徳性を取り戻すための倫理的な基礎づけではなく、20世紀の悲劇を引き起しながら次世紀においても終息しそうにない、政治的な対立の絶対的な克服という夢が陥る隘路を周到に回避した、社会システムの一環としての「政治」（政治システム）の記述なのである<sup>\*48</sup>。

政治権力という「意味の境界線」における差異化を記述するということは、サンクション（賞罰）に基づくさまざまな権力源泉がいかに政治化されていくのか<sup>\*49</sup>という面のみならず、「政治化されえない」権力源泉の存在を浮び上げらせ、政治システムそのものの臨界がいかんにして立ち現われるのかという「政治システムの外部で、政治システムとは関係の無い所に生まれ、残存している社会権力」<sup>\*50</sup>の存在とその可能性を抉出・提示することにもなる。ただし、先にも述べたように、ここにも「盲点」はつきまとい、戦後民主主義的な価値の未浸透部分（残余）を埋めるように、「グローバル化」や「国際貢献」「情報化」「テロ対策」といった抽象概念が、そのまま既定の国家目標（＝公のヒエラルキー構造の上位審級）である「かのように」振る舞いはじめ、「総てを単純化する恐ろしい人々」（フリードリッヒ・マイネッケ）という「亡霊」が、日本社会を闊歩しているのである<sup>\*51</sup>。

2004年末に新しい防衛計画の大綱が発表されたが、大綱の策定は冷戦期の1976年、冷戦終結後の1995年に続いて9年ぶりの三度目である。国全体が700兆円の

債務を抱え、国債発行も減額を決めた厳しい財政事情下で、防衛大綱ならびに中期防衛力整備計画（中期防：05～09年）予算、新年度予算という「三つの山」において、「聖域」とされていた防衛予算の削減（特に自衛隊の部隊編成や主要装備の見直し）をめぐっての財務省と防衛庁との攻防は、現大綱までの「必要最小限の防衛力を有する」との基盤的防衛力という考え方に代わって、多機能弾力的防衛力との概念が提示され、陸自5000人減、中期防9200億円削減で決着した（総額は24兆2400億円）。1986年に中期防が開始されてから初の減額ではあるが、テロなどに緊急展開する「中央即応集団」が新設されている。女性初の主計官としてメディアに注目された片山さつきは、この攻防を「典型的な構造改革問題」と位置づけながらも、きわめて率直かつ辛辣に、市ヶ谷（防衛庁）における「シビリアン・コントロールの実態に、重大な懸念を感じざるをえなかった」との感想を漏らしている<sup>52</sup>。いわゆる「制服組」の「関東軍化」への憂慮の表明であり、その驚愕すべき実態についてはさらなる検証が必要であるが、かつて研究者によって「有能なアマチュア」<sup>53</sup>と喝破されたことを想起させるような（旧大蔵）官僚によって、防衛論議がある程度「オープンシアターみたい」に国民を観客に行われたことは、幾分彼女の自賛も含まれているだろうが一定評価できるのではないか。

「参加者は、完全にできあがった、決定版的な意見を最初から持つべきではない。彼らは有意義な討論に参加することが期待されている。つまり、参加者は、他の参加者の論拠に照らし合わせたり、同時に討論の過程で有益な新しい情報を利用できるようになることで、自分がもともと持っていた意見をいつでも作り変える心づもりができていなくてはならない」<sup>54</sup>

七五  
いずれにせよ、不確実性に満ちたこの世界において、人間の主体的な行動はその生の豊かさの源泉である。失敗による失望や不安による怯えなど、不確実性の帰結には苦い味のものが多いが、不確実性を前提にした構えがいわば「意図せざる結果」をもたらし、最初からコストがわかっていたら、挑戦しなかったはずの課題を成し遂げることもありうる。すなわち、「蓋然性 probability」

や「確実性 certainty」を追求する既存の認識フレームでは、別の可能性を否定して生起しつつある現実を取り逃がしてしまいがちなのである。

巨大な社会システムにおいては、主体的な選択行動が社会的なコミュニケーションのネットワークに新たな情報として入力された結果、「可能性 possibility」の領域が拡大するか否かは、かなり投機的な要素を内包している。そのために、ルーマンのメディア概念は、完全な成功（ギャップ＝裂け目といった「可能性」の残余の解消）はありえないとしても、それが「ありうるかもしれない」と参加者に信憑される程度には、不確実性を「懐柔」できる装置として提出されている。コミュニケーションの理解／到達／成果といった不確実性の問題は、政治システムの複合性（の縮減）の基底にあるものであるが、インターネット社会の到来は、特に到達の不確実性の質を根本から変えてしまっている。「どこでもコンピュータ」のユビキタスの唱道者によれば、インターネットほどの世界規模の情報ネットワークがこれだけ短期間に広まった背景には、インターネットが「ベストエフォート」という考え方で作られているからとのことである<sup>\*55</sup>。インターネットは、「個々の参加者が自分の担当部分をそれぞれの収支モデルで納得してシステムを運用し、それが集まることで機能」し、「低コストで容易に広まるが、全体に対する責任者が不在で、性能に対する保証がない」システムであり、そこでの運用理念が「ベストエフォート」とされている<sup>\*56</sup>。

「小泉純一郎首相は1日昼、イラクで香田証生さんが殺害された事件について「人質を解放できなかったことは残念。しかし、政府として最善を尽くしました」と記者団に語った。一方、細田博之官房長官は同日午前の記者会見で「前回の（4月の日本人質事件の）場合は無事に帰国している。今回の場合、（政府の）努力が功を奏さなかったことは反省しなければならない」と、首相のように「最善」を強調しなかった。」（毎日新聞）

七四

「麻生渡福岡県知事と向野敏昭直方市長が11月4日に外務省を訪れ、町村信孝外相に「政府は解放に向け全力を尽くしてくれた。遺族も感謝している」

などと、政府の一連の対応への謝意を伝えた。」(西日本新聞)

イラク全土に非常事態宣言が出た状況で、今後も戦闘が行われたいとする根拠を訊ねられ、「将来を百パーセント見通すことはできません」といつもながらの放言をした首相が、「ベストエフォート(最善の努力)」なるレトリックを玩弄している。「最大限の努力」とは、飛行機や動作保証のないパソコンのごとく、プログラムのバグ(不具合)を完全になくすことは「事実上不可能」ということを前提にした現実への対処法である。巨大で複雑なシステムにおいては、提供する側は最終ユーザに対し、エンド・ツー・エンドで完全保証することは不可能なことは理解できる。しかし、結果に対する責任倫理を旨とする「政治」の世界(特に小泉流「ワンフレーズ・ポリティクス」に導入された場合、恣意的に使用されると、自己責任を回避するどころか、逆に他人に感謝さえ強制しかねないものとなろう。

「小泉改革は、ゴールなど最初から目指していないとしか思えません。あの人にとって大切なのは、大汗をかいてグラウンドを走り回り、ボールを蹴っているイメージを観客に植えつけることなんです。`地元`に利益を誘導しない、というのが、小泉さんのスローガンですが、あの人は地元に限らず、誰にもリターンしたことがないんじゃないですか。

小泉さんの手法はよく`ワンフレーズ政治`といわれますが、ワンフレーズというのは、いろいろな思い、思考過程を煮つめて、これしかないという一語にしたものでしょう。けれど小泉さんの場合は、`カタコト政治`だと思えます。あのワンフレーズの後ろには何もありません」

(道路公団改革関係者)<sup>\*57</sup>

断定的な口調になるが、今後の政治は、「ベストエフォート」というイメージを確保するための演出にヴァージョンダウンしていくだろう。そこに出現するのは、対話や議論の不在による公共性のさらなる溶解であり<sup>\*58</sup>、そうした「悲惨な現実」を埋め合わせるために過剰なファンタジー化である<sup>\*59</sup>。取り返し

のつかない大事故の原因となりうる小さな錯誤や判断ミスの積み重ねを「ベスト」\*60という曖昧な言葉で押しつぶしてしまうことは、「成功率100%」をめざして、0%からはじまる道のりを歩もうとする所作を放棄させることになり、強弁によってミスや責任を認めずに「失敗率0%」の「亡霊」にとり憑かれたままとなる\*61。そうした「亡霊」を追い祓うためにこそ、「ベストエフォート」の理念は提出されたはずであることは十分理解できるものの、すでに日本政治の不具合（バグ）に落ち込んでしまった若者のかけがえのない生を、その言葉で回収してしまった事実を直視する時、何ら留保なしに肯定的な評価ができないのは当然なのではないか。

#### 04 幽霊と監視社会

「自分の身体は確かにここにあるのだけれど、それを確認するには、「呼びとめ、呼びとめられること」からしか始まらないような気がします。自分がいくら自分だと言ったところで、今、そこにいる人が認識してくれなければ、幽霊と変わらないということです。」\*62

リアルタイム（オンタイム）に照準する監視社会は、時差（遅延）によって空隙が生み出される。リアルタイムでは存在しないはずの「幽霊」、あるいは同一化の暴力から逃れる代償として国家＝法からの庇護を享受しえない「剥き出しの生」は、コミュニケーションが受け手であるその者にまで到達し理解されるにしても、コミュニケーションが受容されて、それに従われるかどうかは確実ではない（「成果Erfolg」の不確実性）。たとえ自己がある確定したポジション、あるいは統一的な自己イメージを確保していると考えていても、それが「裏切られる」こと自体を原理的に否定することはできない。例えば、称賛の言葉が（受け手が喜ぶといった）意図通りの事態を引き起すとは限らないので

人間主体と公共性（公共空間）との関わりにおいても、松下圭一が説くよう

に、公共とは差異をそのまま承認するものではなく、「市民が社会の多元・重層構造をふまえて相互に、さし当たり模索すべき①<問題>」であるということと並んで、「そこには、多元・重層型に公共が成立するため、相互に予測・調整しあえる②<仮設>として、公共がたえず問われていく」という「問題ないし仮設」としての理解が要請されているのである<sup>\*63</sup>。われわれが馴染んだ世界においては、差異や多様性は当たり前のものであり、隣人との近接性に応じた感嘆や驚愕を飼い馴らして、<リアル>の介入をやり過ぎておけば済むのである。ところが、「まだ存在しないが、やがて存在するようになるべきもの」が生起しているこの世界を生きる主体は、「不可能なもの」としての「真理」に向かわねばならない<sup>\*64</sup>。「不可能なもの」を目指すことは、「死すべき存在とは違う何か」であり続けようとする意志の内こそ、人間主体の本質が存在するということになる。言い換えれば、人間主体とは悪・暴力に曝されたく犠牲者>、もしくは<犠牲者>として自己を認識することのできる者であり、「死すべき存在」もしくは「見捨てられてよい」存在と見なされてしまう（知識＝情報として処理されてしまう）のは、人間／非人間の差異が抹消されたためであり、差異それ自体は何ら擁護すべきものではないのである<sup>\*65</sup>。

生起しつつある現実をやり過ごすことなく、自己の主体性の本質たる<犠牲者>との同一化からすらも身を引き剥がし、「その内にありつつも、そうしたアイデンティティとは一致しない」部分にこそ、この世界の<リアル>が宿るとするならば、映像イメージに代表される、この世界に散乱している多くのイメージに明確な像を結ぶ作業において（それは多くの場合、批評と呼ばれるが）、次のような人間主体（モーリス・ブランショに言わせれば、「知識人」＝「犠牲者について語る者」）の問いを主体的に受けとめ、各項目について、真正な想像力を及ぼさざるをえない<sup>\*66</sup>。

七 1 多くのイメージが実に安易な形で<犠牲者>を道徳的に神聖な存在に仕立てあげてしまっている。そこに「良心的ヒューマニズム」と呼ばれる感傷性が付加され、新たなステレオタイプが形成されていく。

2 時代時代によって、<犠牲者>が誰であったかの認定基準がどんどん

変わってゆく。誰が〈犠牲者〉であるかを指定する声は、つねにイデオロギー的なものである。イメージ戦略はこの変化の事実をどう受け止めていけばいいのか？

3 〈犠牲者〉の物語を集合的な記憶のもとに語るべきなのだろうか？ それとも個別性に基づいて、表象してゆくべきなのだろうか？

4 〈犠牲者〉のイメージを生々しく提示することで、観客に衝撃を与え、語り全体に異化効果を増幅させることは、どこまで道徳的に正当化されるのだろうか？ あるいはその逆に、いっさいの距離化の契機を摘みとり、〈犠牲者〉の物語をメロドラマに仕立てあげることは、どうだろうか？

5 〈犠牲者〉をめぐる表現において、それを提示する主体と観る主体には、どのような視座を与えられているのか？ どこまで〈犠牲者〉の視座に接近し負担することが可能なのか？ またそれが許されているのか？\*67

6 〈犠牲者〉の表象との関連で、よりさらに「他者」である、例えば動物の表象をめぐる問題を考えることは可能だろうか？

7 〈犠牲者〉をめぐる表現へ接近させる修辞としてのノスタルジアと感傷性とは、何だろうか？ 接近しやすさを保証しているものは、何だろうか？

8 カメラを向けられた〈犠牲者〉がいつまでも沈黙を続け、撮影を拒否するとき、そこでは映像をめぐるどのような政治が生じているのか？\*68 スピヴァックが語る「サバルタンを語りうることの困難」とは、どのような形をとって現れるのか？

9 〈犠牲者〉を作品化することで利益を得る者は誰なのか？ その行為が招き寄せてしまう「搾取」（経済的な、アカデミックな）を、どのように考えればよいのか？

10 〈犠牲者〉が自分を抑圧している状況に対して対抗している映像を流すことが、正しいのか？ それとも彼らがこの状況に盲目であり、抑圧構造をもつ社会のなかでみずからも抑圧的存在として立ち振舞い、さらに悲惨の度合いを深めていくことの映像を提示することの方が正しいのか？ 犠牲者はつねに映画のなかで不幸な存在として表象されなければならないのか？

彼らがそれなりに幸福であることを示す映像は、どのように正当化されるか？ 隠蔽行為はどちら側において、より深刻な形でなされているのか？

11 <犠牲者>をめぐる喜劇映画とはどのようにして可能なのか？ 観客はいかなる立場から、それを笑えばよいのか？

12 <犠牲者>を直接に表象するのではなく、寓話という形式を借りて描くとき、そこで生じる問題とは何か？

<犠牲者>が「死すべき存在」と峻別されるのは、苦痛に歪む顔に刻まれた暴力の痕跡によってである。その痕跡を看取り、不死の存在たらんと「不可能なもの」を意志する時、われわれは人間でありうるのである。「偶然盛り上がる自殺衝動をとめるのは、ただひとつの必然を想像することだけかもしれないとも思います。それは、自分より先に偶然を選んでしまった存在のことです。その人のことを思った時に感じる絶望と悲しみの感覚だけは必然で、その必然が偶然をとめるんじゃないかと思うのです」<sup>\*69</sup>。これは多様性の認識ではなく、何らかの生産されるものへの忠誠であるともいえる。とはいうものの、ハイデガーの思索が導くように、現代の情報メディア環境における不安は、「主体 - 対象」関係ではとらえられないのであって、特定の対象によって不安は引き起されず、自分が立っている「いま - ここ」、あるいは世界との関係が動揺させられ、世界が、あるいは世界から自己が脱落してしまう。人間化されえず制御不能なまま放置されている技術の《ポテンシャル》に自身の浮動を既 - 定されている「現存在」は、「その《ポテンシャル》を制御できないままそれに委ねられ、それへと身を曝し、引き渡され、完全に無防備で無力な人間の姿として再発見されることになる」<sup>\*70</sup>。こうした《ポテンシャル》に投げ出された無力な人間の姿を観察しうるのが、今日の監視社会への不安である<sup>\*71</sup>。

六九 例えば前田壘が指摘しているように、イラクでの二度にわたる人質事件をめぐる「自己責任」議論についての分析は、たとえそれが「左右いずれのウィングの論調にも文字通り彼らそれぞれの関心=恣意に依拠する論理の曖昧さや感情的所作が満ちみちていた」ことを指摘して、「『誰の、なにに対する責任か』という観点で細分化し、人質たちと国家それぞれの責任を比較衡量するべく

「責任」評価の基準を提示すべし<sup>\*72</sup>との明晰な論旨で展開するものであったとしても、「自衛隊の派遣」問題という困難に直面することになるだろう。また精神障害者による犯罪事件が起こるたびに、「障害者の人権/社会の安全」といった「まったくもっていかがわしい対立」<sup>\*73</sup>が再生産され流通し続けているが、そのことについて、ある歴史家が以下のように告発している。

「社会が直視すべきは、百年、いやそれ以上にわたって人権をまったく無視し、精神障害者を閉じ込めてきた「歴史」ではないのか、そして、今なお社会からも法の世界からも精神障害者を排除している、そうした「現実」ではないのか」<sup>\*74</sup>。

われわれの生が《ポテンシャル》に左右されることにより、リスクに対する「不安」が身体や内面を含めた人間のあらゆる領域を覆い尽くすことになる。冷静に統計等を読み解けば、マクロ的には犯罪は増加していないし、凶悪化もしていないにもかかわらず、「体感治安」が悪化の一途を辿っているのは、《ポテンシャル》を制御しようような理解を共有し合える信頼関係を支える安寧な日常生活の時空間（＝「セーフティゾーン」）と、「いつ、どこで、誰が」犯罪やリスクに遭遇するかわからない「禍時悪所」とを隔てる境界線が消失してしまったためである<sup>\*75</sup>。しかも消失（による不在）という現実が、逆にその境界線（の实在）への執着を呼び起こし、この世界（特に＜政治＞や＜社会＞）を語る際に、近代科学的因果律から「原因」の物語の捏造へ、あるいはスーパーフラットな世界をクリックして超越的なものへとすぐさま接続（偶然/必然を短絡）してしまうような、恣意的でad hocな話法が支配的となっている<sup>\*76</sup>。その中で見失われてしまうのは、自己の生のイメージを制御する上で必要な最低条件であるはずの他人の（その「弱さ」をも含めた）トータルな自己イメージの制御に対する尊重、ひいてはプライバシーへの配慮である。そのプライバシーとは＜社会＞のあり方を規定するものであるがゆえに、アーノルド・ミンデルが強調するように、＜力の不均衡＞に対する自覚がもう一方で要請される<sup>\*77</sup>。そうした不均衡に無自覚であるならば、特権の濫用 ab-use につながり、「口ご

もり」がちに、あるいは「叫び」とともに発せずにはいられない人びと（階級や集団）の声に耳を閉ざしてしまうことになるからである。力の欠如や貧困に苦しむ人びとは、そのことを強く主張したとしても、主流派に要求される「上品」で理性的なコミュニケーション様式に合致しなければ、無視（ネグレクト＝虐待 ab-use）されてしまうのが常なのである<sup>\*78</sup>。それゆえに、誰もが<力の不均衡>による傷を抱え込む「加害者であり、被害者でもある」存在であるという端的な事実の確認を、不毛な相対化の場所へと送り返してしまうことなく、私（たち）はいかにして自らの関心に対して「適切な」距離をとることができるのであろうか<sup>\*79</sup>。

例えばクリステヴァは、「切られた首」（!）のヴィジョンの分析を通じて、あらゆるイメージの起源にある残酷で崇高なるものを提示しようとしている<sup>\*80</sup>。彼女は、原型との「類似」にとどまらないイメージのあり方に関心を集中し、それ自体は形をもたない不可視の世界との関係を言い表すために、独自の「多義的な」用語を駆使しつつ、イメージは潜在的に自由の空間であって、「聖なるものとの唯一の絆」として機能している側面を強調する。

「ここでは切られた首が問題となる。それが私たちに明かすさまざまな歴史は、残酷なものだ。それらの歴史を通して、死の欲動に取り憑かれ、殺人に恐怖を感じた人類は、結局、力強くはないが、心に深く響く次のような発見に達したと認めている。つまり、唯一可能な復活は……表象だろう、という発見に。曝された斬首の光景はその証拠である。その暴力的な光景から洗練された光景までをたどる旅へのご招待しよう。この道筋をたどり終えた後では、斬首があろうとなかろうと、あらゆる光景は首の実体変化にほかならないということをお納得していただけるだろう。」<sup>\*81</sup>

六七 犠牲とされた者と犠牲を捧げた者との間には、不可視の世界との「唯一可能な横断の道」であるイメージによって、恐怖や心の平穏、表象の悦び、あるいは甘美なノスタルジア（＝忘却）などが絶えず呼び起こされ、その評価は反転し続けることになる。すわなち、「この世界」は、決して十全には公共化しえ

ない脱・局的な「ずれ・不可知性・謎・穴（裂孔）」に満ちており、そうした「[謎] や「秘密」への権利なくして、「真」の「来るべき」共同性、公共性はない」とさえ言えよう<sup>\*82</sup>。なぜならば、誰もが<力の不均衡>による傷を抱え込むこと（人間の本性である原理的な「疎外」）の意識化は、「この世界」の不確かさへの感受性をもつことであり、人は自分では完全には制御できない「他なるもの」を自分の内側に抱え込んでいるのである<sup>\*83</sup>。そうであるからこそ、「他でもありえた」という後・悔のよって、ことばによるコミュニケーションの現場（起源の問い）に「絶対的に遅れて」引き出された子どものように、私（たち）は「この世界」を再び歩み出すことができるのである<sup>\*84</sup>。

「このプロセスの驚嘆すべきところは、規則を知らないゲームをしているうちにプレイヤーがその規則を発見するという逆説のうちにあります。

まわりの人々の発する音声の意味を伝える記号であることがわかったのは、意味不明の音声について、「これは何かを伝えようとしているのではないか？」という問いを子どもが立てることができたからです。』<sup>\*85</sup>

注

- \* 1 『イン・ディス・ワールド』(2002、マイケル・ウィンターボトム監督)
- \* 2 この「忌まわしいイメージ」についての考察は、今福龍太2005「皮膚の歴史——シャドウ・アーカイヴとしての映像」『InterCommunication』No.51を参照した。
- \* 3 新聞報道などによれば、千葉県浦安市で2004年の年末(12月26日)に開かれたロックコンサートでは、バンド「K L A C K (クラック)」の演奏中、イラクで香田証生さんが殺害される画面が大型スクリーンに映された。主催のTBSによると、映像内容については事前に知らされていなかったといい、TBS、興行会社などがバンドの所属事務所に抗議した。TBSは「人道的に決して許されるものではなく、香田さんご家族、来場者に深くおわび申し上げます」と話している。
- \* 4 支援活動において意識的に伏せられていた個人情報だが、青年やその家族は地元・北九州のキリスト教系団体と関係があった。
- \* 5 例えば大月隆寛は、いつもながらにその露悪ぶりを徹底させ、「切られてよかった」とまで放言している。そのことの評価はさておいて、「考えなしの極限値みたいな穀潰しの首ひとつ落っこちること」を、かつて三島由紀夫の首が落ちて<戦後>の位相に大きな変化がもたらされたことと重ね合わせて論じているのは、大変興味深い(『サイゾー』2005年1月号:68-69頁)。禍々しいイメージをまとった三島の首は、逆説的のだが、右翼や軍隊的なものへの嫌悪を人びともたらしたと評することもできる。
- \* 6 こうした被害者側の「リスク」については、2004年に佐保保で起きた小6同級生殺害事件に関しての、被害者の女児の父親で新聞記者でもある御手洗恭二さんのコメントが参考になる(毎日新聞2004年12月27日)。

「一般的に殺人事件で加害者が判明している場合、記事は加害者の供述が中心になることが多い。しかし、供述が被害者にも非があると取れるような「言い分」の時、被害者側は傷つくばかりである。反論したくても被害者側は精神的にも対応できないし、打ち消すだけの材料も持っていないからだ。その気持ちが、こんな記述につながったのだろう。

家族への取材を恐れていることも分かる。取材自体が家族に与える影響というより、取材された時に話した言葉がいったん報道されると、良くも悪くも本人の想像以上に大きな力を持つためだ。そのリスクを背負うのは私だけでいいと思っていた。」

こうした言葉の重みは、後述するように、ある決定的ともいえる「手遅れ」の感覚につきまとわれるものである。1998年1月に大阪府堺市で起きた19歳の少年による通り魔事件について、加害者の少年に関するルポルタージュ(実名報道で知られる)に目を通すならば、自滅の道を歩んだシンナー中毒の少年の背後に、祖父母による養育、「O-157の影響」により傾いた家業、貧しい食生活ゆえの「小太りの」弟、大阪鶴橋の「韓国人の友達」、吃音など、現代社会の軋みを一身に背負わされたような生活環境のリスク要因が記号のごとく列挙されており、呆然とさせられる(高山文彦編著2002『少年犯罪実名報道』(文春新書)Ⅱ)。

- \* 7 大澤真幸2005(a)「不可能性の時代 戦後史の第三局面」『世界』1月号:101-111頁

- \* 8 大澤真幸2005 (a) : 110頁
- \* 9 neil young & crazy horse 'falling from above' in "Greendale"

「…ま、グリーンデイルは良い町だけど、思いがけない出来事もあるわけで…俺でさえ知らないような色んなことがグリーンデイルでは起きているということ。想像出来るかな？ 自分ででっち上げた町なのに、何が起きているのか知らないなんて。だから皆さんがちょっと何だか入り込めないと感じてても気にせずに。分かっている人なんていないのだから…」

(＜ニール・ヤング本人によるアルバム収録曲解説＞より)

- \* 10 田村元彦「第20回参院選に寄せて 無党派層は二大政党に囲い込まれるのか」西日本新聞2004年7月13日13面 (加筆修正済み)

「無党派」層の原型の誕生に関する研究者による指摘については、橋本晃和2004『無党派層の研究 民意の主役』(中央公論新社)を参照。

- \* 11 大澤真幸2005 (a) : 111頁
- \* 12 宮台真司・伸正昌樹2004『日常・共同体・アイロニー』(双風舎) 24頁を参照。
- \* 13 大澤真幸2005 (a) : 111頁

現代の多文化主義における＜政治＞は、全体を包括する(普遍的な)水準では所謂＜帝国＞という描写を得るが、その帰結は「反省的意識をもつ、啓蒙主義的なナショナリスト」のごとき、個々の特殊な要素への分解(執着や没入)であることについては、大澤真幸2004『帝國的ナショナリズム 日本とアメリカの変容』(青土社)Ⅳを参照のこと。

- \* 14 こうした社会に対する「無力感」を素直に、しかも剛直に表明した研究者の文章を引いておきたい(村田豊久2004「アスペルガーということばの流布への異議」『教育と医学』10月号:97頁)。

「少年の殺人事件のたびに、私に多くの新聞社や放送局から電話がくる。私はいつも、殺人は子どもであれ、大人であれ絶対に悪い、決してしてはならない、ブッシュさんはアフガニスタンでも、イラクでも空爆で多くの子どもを殺している、小泉さんはそれに異を唱えない、そう書いてくださいとお願いしてきたが、応じてくれたところは一つもないのである。／…(略)…何をさしおいてもしてはならないこと、絶対に守らなくてはならないことが、今や世界中でないがしろにされようとしている。このような状況で大人が子どもたちに、生命の大切さをことばだけでいくら説いても、空しさだけが残る。」

- \* 15 丹生谷貴志2004『三島由紀夫とフーコー＜不在の思考＞』(青土社) 43-44頁

「戦後民主主義」を規定してきた言説は、例えば日本国憲法/皇室典範、憲法9条/自衛隊・有事関連法といった内包する「法の二分割」を解消することなく、そうした自己矛盾を顕在化させないために、日本国民の自己検閲あるいは自己規制、すなわち「自粛」を要請した。いわば日本国民は自身が持つ主権を行使しないことを条件に、主権が与えられたのであり、「言表されない、してはならない、することはできな

い) (不可侵の!) 「自粛」(という実定法を事実上否定する法)こそが、成文法に先立って、日本の「国のかたち」を既一定しているのである(若森米樹1997『裏切りの哲学』(河出書房新社) 61-68頁)。

\*16 「本当のこと」については、拙稿(田村元彦2004「行為と弁明—プライバシーと公共性(3)」『西南学院大学法学論集』36巻3・4号)を参照のこと。

\*17 渋谷望2005「<自立>への封じ込め」『InterCommunication』No.51:119-120頁

ポスト福祉国家の代表的なプログラムである「第三の道」においては、「道徳性」や「積極性」がシティズンシップの条件となる。その政治的な特徴は「道徳・政治 ethico-politics」と呼ばれ、エートス(倫理=道徳)の増進と「エートスなき者」を排除する社会を作り出す(同218頁)。こうした(特にアメリカの)現実を見事に描いているのは、スビルバーグ監督の『ターミナル』(2004)である。

Cf. Rose, N. 1999 *Power of Freedom*, Oxford U.P.; Rose, N. 2000 'Community, Citizenship, and the Third Way' in Meredyth, D. and Minson, J. (eds.), *Citizenship and Cultural Policy*, Sage.

\*18 特に政治への有効性感覚が低下しつつあるという統計的事実については、NHK放送文化研究所編2004『現代日本人の意識構造 [第六版]』(NHKブックス)Ⅲを参照のこと。98年調査になって、(自分たちの意見や希望が国政に)「まったく反映していない」という厳しい意見が急激に増加し、03年になってあまり減少していないことが注目される。地域別・職業別にみれば、近年の国政選挙の結果から予想されていたように、「保守基盤を支えてきた人々」の有効感覚の低下が顕著である(同78-80頁)。

\*19 金原瑞人2004『大人になれないまま成熟するために 前略。「[よく]としか言えないオジさんたちへ」(洋泉社新書 y) 188-189頁(丹生谷貴志1999『天皇と倒錯 現代文学と共同体』(青土社)も参照)

金原は「変化が反復によって置きかえられる」事情について、精神医学者の中井久夫のエッセイ(中井久夫2002『清陰星雨』(みすず書房))からきわめて興味深い一文を引用し、70年代以降の日本が、同時代の当事者たちの自己認識のレベルをこえて、「何の反省もハードルもなしに、一方では転落し、他方では社会の支配層まで順調に上り詰めていった様子」を結像させている(金原瑞人2004:41-42頁から再引用)。

「中国では「文化大革命がもたらした二十年の空白」のために、指導層は、高齢であるか、それとも非常に若いのである。例外もあるにはあるが、学生革命に参加した世代の多くは飛び越えられてしまったようだ。日本ではそうはならず、この世代が、今、国を運転している層の多くを占める。

日本ではこの世代の大部分は、レポートを出すぐらいで大学をめでたく卒業している。この「寛容」に支えられて一部は官僚になった。私の僅かな見聞の限りだが、その一部には「とびきりむきだしの官僚」を感じさせる人びともいた。……(略)……一部官僚の起こす不祥事件の野放図さは、「社会をなめる」ことを紛争の最中あるいはその後の社会側の処理によって覚えたためもあるのではないか。日本の殺人者のピークは、世界を見渡しても全く例外的に五十歳であり、しかも幼稚な動機によることが特徴だという。……」

- \*20 玄田有史2004 「『即戦力』の幻想」『アステイオン61』92頁
- \*21 小林和之2004 「『おろかも』の正義論」(ちくま新書)(特に第6章「他人に迷惑をかけてはいけないか」)を参照のこと。小林はその考察の過程で、「そもそも「人に迷惑をかけてはいけない」とは誰に向かって言う意味のあることばなのだろう」と問い直している(同125頁)。
- \*22 玄田有史2004:80頁
- \*23 以下の記述については、清水知子2004「ネズミとモンスター ポスト冷戦とソフトパワーの地政学」『ユリイカ』12月号:201頁を参照した。  
Cf. Žižek, Slavoj & Daly, Glyn 2000 *Conversation with Žižek*, Polity Press.
- \*24 清水知子2004:202頁
- \*25 沖縄に行きわたっている「非対称的な分断の力学」については、我部政明2002『日米安保を考え直す』(講談社現代新書)を参照。また、この力学が暴力の痕跡を除去するために捏造してきたイメージ(ナショナルな物語への参入による二重の現実の押しつけ)については、多田治2004『沖縄イメージの誕生 青い海のカルチュラル・スタディーズ』(東洋経済新報社)を参照のこと。  
国際法学者の最上敏樹は、沖縄にある米軍基地のフェンスについて、「米軍基地ではなく、沖縄の人々を囲い込んでいるのだという印象を受けるのです」と述べて、「人を閉じ込めてはならない」というサイドの言葉を引いている(最上敏樹2004『NHK人間講座 いま平和とは「新しい戦争の時代」に考える』(日本放送出版協会)第8回)。これは物理的な「囲い込み」のみならず、個人の自己イメージについても該当すると思われる。
- \*26 『モーターサイクル・ダイアリーズ』(2003、ウォルター・サレス監督)
- \*27 Luhmann, N. 1984=1993『社会システム理論(上・下)』(佐藤勉監訳、恒星社厚生閣)を参照のこと。
- \*28 以下の社会システム論に関する記述については、清水太郎2004「ルーマン理論のコミュニケーション(上)」『春秋』12月号:1-4頁のほか、『Kei』(ダイヤモンド社)連載中の宮台真司「M式社会学入門」や『InterCommunication』(NTT出版)連載中の北田暁大「ディスコース・ネットワーク——2000」等を参照した。
- \*29 今野勉2004『テレビの嘘を見破る』(新潮新書)などを参照。  
「撮ること自体が発見である」という立場を選択する是枝裕和は、マイケル・ムーア監督の『華氏911』(2004)に対する当初の否定的見解(「撮る前から結論が先に存在するものはドキュメンタリーとは呼ぶまい」)を反転させて、単なる映像作品としての評価にとらわれず、「健全な形で怒り、を表明する器としてのドキュメンタリー」のポテンシャルを回復するものとして、「そこに表明された彼の怒りの切実さが多くの人々の心を揺さぶったこと」を評価している(今野勉2004:214-215頁)。「世界と向き合うことを止めて、ジャンルに自閉してしま」うことの危険性を意識的に回避しつつ他者に差し出された作品であっても、一つの構成された現実なのであって、一義的に評価を確定することができない。
- \*30 保阪正康2004『大本営発表は生きている』(光文社新書)第三章  
民主党の岡田克也代表との党首討論(2004年11月10日)において、イラク復興支援特措法が定める「非戦闘地域」の定義を訊ねられて、「自衛隊が活動している地域が非

戦闘地域だ」と答えた小泉答弁は、「戦時下」の東條英機首相の答弁と瓜二つではないかという指摘がなされている。東條は「戦時下ではない状況は」と問われて、「平和の回復、それが戦争の終わりである」と答えたという。

- \*31 保阪正康2004：163頁
- \*32 この観察者の「盲点」を観察することを、ルーマンは「セカンド・オーダーの観察」と呼んでいる。
- \*33 佐野史郎2004『怪奇俳優の演技手帖』（岩波アクティブ新書）199頁  
ただし、憲法学者の長谷部恭男は、「気づいてもいわないほうがよいこともある」の典型例として、<「気づいてもいわないほうがよいこともある」ということ>を挙げて、「こんなことをいうと、「この人は気づいてもいわないでいることがあるんだな」って他人から警戒されかねない」ためであるとしている（長谷部恭男2004『Interactive憲法・番外編』『法学教室』12月号（No.291）56頁）。
- \*34 完全なるコミュニケーションの夢を打ち砕いてしまう幽霊のごときイメージ群についての分析を、著名な「政治学者」が「政治家の世界」よりも視野を広げ、その社会の共通了解と時代精神の変容を跡づけること」とその意義を「理屈」づける（あるいは「いいわけ」する）ことが、必要である（と信憑されている）のが、（丸山真男の「本店／夜店」の使い分けの弊害としか思えないが）現時点の貧しい「現実」である（藤原帰一2004「映画のなかのアメリカ・第一回 兵士の帰還」『論座』10月号：172-173頁）。また経済学者が文学テキストを分析する場合も、「フィクション／事実」「真実／ウソ」の二分法から、一元論的なモデル思考の「空隙」を埋めるものとして位置づけている（猪木武徳2004『文芸にあらわれた日本の近代 社会科学と文学のあいだ』（有斐閣）序章「モデルとストーリーのあいだ」）。
- こうした批評的実践の貧困な状況について、柄谷行人は次のような見解を示している。（柄谷行人・大澤真幸・岡崎乾二郎・浅田彰2004「絶えざる移動としての批評」『文学界』11月号：153-154頁）

「かつて文学の領域でも、批評家はもっと具体的な技術批評をやれ、もっと小説の書き方を示せ、という意見がありました。特に小説家がそういうことをいった。もっともらしく聞こえるんですけど、そのような意見を一番バカにしたのが中上健次です。中上は批評を読むのが好きでしたが、批評家に小説の技術批評なんてやってほしくない、第一そんなことができるわけがないと思っていた。そんなことを考えるのは小説家の仕事で、批評家がそんなことをいう必要はまったくない。『批評家の仕事は考えることだ』と中上はしていました。／映画批評だってそうですね。カメラのアングルがどうのこうのとか、妙に技術のことを言うでしょう。カメラマンに殴られるよ（笑）。プロはそれしか考えていないわけですからね。素人のくせにそんなことを知ったかぶりして言うことが批評だと僕は思わない。建築にしても文学にしても、同じことです。」

六  
一

- \*35 馬場康雄2001『ルーマンの社会理論』（勁草書房）などを参照。
- \*36 以下の記述は、Zupančič, Alenka 2000 *Ethics of the Real: Kant Lacan*, Varso. = 2003『リアルの倫理 カントとラカン』（富樫剛訳、河出書房新社）第3章を参照。

にわかには信じがたい愚かしいことであるが、感情リスクなるものが問題となっており、情報の送り手がリスクを技術的側面からばかり取り上げて、その社会的影響を考慮しないことが、多くの問題を引き起しているという「リスクの社会的増幅理論」を拡大解釈して、「報道が社会を必要以上に暗く描いており、そのために僕たちが愛国心を抱けないようにしている」と不満を語ったという、あまりにナイーヴな東大生の言葉（しかもサンプル64人！）を真に受け、「メディアが暗い報道をする」→「日本の若者が夢を語らなくなった」と短絡させてしまう憂い顔の道徳家たち（大学教授や新聞記者）が実在していることには、暗澹とせざるをえない（中村政雄2004『原子力と報道』（中公新書ラクレ）183-184頁）。

\*37 Zupančič 2000=2003：71頁以下

またLacan, Jacques 1992 *The Ethics of Psychoanalysis* =2002『精神分析の倫理（上・下）』（小出浩之ほか訳、岩波書店）も参照。

\*38 Zupančič, Alenka 2000=2003：17頁

\*39 例えば、日米安保の（他の軍事同盟関係とは異なる）非対称性を規定しているのは、自立／依存、あるいは「巻き込まれる」恐怖／「見捨てられる」恐怖というジレンマである（我部政明2002：53頁）。またそうした非対称性が（黒船ーテポドンの衝撃の系譜において）他に投射されたものが、近年の対北朝鮮パッシングであると評することもできる。「圧力を行使すれば何らかの譲歩を得られると考える人たちは、日本が外圧に弱いから北朝鮮もそうだろうと密かに期待し、外圧にはさらに反発する北朝鮮の政治文化を誤解しているように思われる」（河信基2004『金正日の後継者は「在日」の息子』（講談社＋α新書）234頁）。

\*40 小津映画のみならず、映像イメージの表現の多くが、観る者をいつも置いてきぼりにし、「すでに起きてしまった」出来事の内容をその後の描写や会話から推量するしかない。このような「いつの間にか何かが終わってしまった」とか「もはや手遅れだ」という時間感覚は、クリス・フジワラによれば、「決して奇妙なものではなく、人間の生の本質に関わるもの」であり、「登場人物の生の本質的要素は、それを生きている途中の当人が把握できるものではなく、おそらくはそれを見ている私たちにも理解できないものなのです。本質とは事後に初めて決まるものなので、人の生涯に起きることは手遅れなのです」（長谷正人2004「映画、時間、小津(1)」『UP』12月号：51-51頁）。

\*41 若森栄樹1997を参照。

この他にも、戦後日本の労働運動（あるいは組合潰し！）の流れにおいて、「スト破り」のメンタリティの浸透が「裏切り」のシニジズムをエスカレートさせ、いわゆるポストフォーディズムのモードに変換させられていく様を分析したものとして、入江公康2005「第二組合／スト破り／フレキシビリティ 「裏切り」の系譜学」『現代思想』1月号を参照のこと。

\*42 若森栄樹1997：14-15頁

\*43 日比野勤2004 (b)「憲法を考える前に・第6回 はじめに(6)」『法学教室』12月号 (No. 291：24頁)

日比野は二本の映画を挙げて、その中で相手の正体に気づいたり、ウソを見抜いたりしたのは、目をみることによってであったと指摘している（日比野勤(a)「憲法を考える前に・第4回 はじめに(4)」『法学教室』8月号 (No. 287) 11頁）。オモテ／ウラ

の二段構えが確立し、秘密の保持のための適切な対人距離が保証されることが、自由と信頼の共存を可能にするという日比野の理解は、管理社会とプライバシーの関係を考察する際に参考になる。日比野が挙げた、ウォーレン・ビーティ監督・主演の『天国から来たチャンピオン』(1978)と広末涼子主演の『秘密』(1999)という二本の映画は、雑駁に述べるならば、「幽霊」の物語であることは興味深い。自由と信頼をめぐる「幽霊」の物語で想起されるものとして、『シックス・センス』(1999)と『ペイ・フォワード 可能の王国』(2000)に出演したハーレイ・ジョエル・オスメントの「目」に言及せずにはいられない。

\*44 Dabashi, Hamid 2004 『闇からの光芒 マフマルバフ、半生を語る』(市山尚三訳、作品社) 6-7頁 (モフセン・マフマルバフの序文「一九九六年のディナー」より)

\*45 Galbraith, J.K. 2004 *The Economics of Innocent Fraud* = 2004 『悪意なき欺瞞——誰も語らなかつた経済の真相』(佐波隆光訳、ダイヤモンド社) 72頁

訳者の佐波隆光は、ガルブレイスによる「官と民という二つのセクターにまつわる神話」に対する批判を受けて、かつてケインズが主張したように、「政府がやるべきこと」と「政府がやるべからざること」を峻別する作業の必要性を説いている(佐波隆光2004「政府のやるべきこと、やるべからざること」『Kei』12月号:47頁)。

国家と企業の癒着の問題に関連するテキストとしては、姜尚中&テッサ・モーリス＝スズキ2004『デモクラシーの冒険』(集英社新書)第二章やBakan, Joel 2004 *The Corporation: The Pathological Pursuit of Profit and Power* = 2004 『ザ・コーポレーション』(酒井泰介訳、早川書房)などを参照のこと。特に後者は、サンダンスほか世界中の映画祭で話題となったドキュメンタリー映画の原作である。

\*46 矢野修一2004『可能性の政治経済学 ハーシュマン研究序説』(法政大学出版局) 342頁

\*47 以下の記述については、西菜穂子2004「コミュニケーション・メディアとしての権力に向けて」『社会思想史研究』No.28(藤原書店)を参照。

\*48 西菜穂子2004:49頁

\*49 公文俊平は、主体間の「政治行為」(他主体の行為の制御を目標とする行為)として、ケネス・ボールドウィングやカール・ポランニーを参照しつつ、「脅迫」「交換」「説得」の三つの基本型を挙げている。さらに彼は、近代文明の進化の三つの局面で、各々の行為を主要な政治行為とした組織である「(近代主権)国家」「(近代産業)企業」「近代情報」智業」が台頭してくると考え、「ラストモダン」としての情報化局面で台頭してくる「智業」は、「公」や「私」の原理とは異なる「共」の原理に立脚すると述べている(公文俊平2004『情報社会学序説』(NTT出版)166頁)。

また公文は、こうした三つの基本型を、ハーシュマンの「退出・離脱 exit」「発言 voice」「忠誠 loyalty」の三分法と比較する必要性も述べている(同299頁)。ハーシュマンの三分法については、矢野修一2004:第8章に詳しい。

五 \*50 西菜穂子2004:49頁(Luhmann, N. 1975=1986『権力』(長岡克行訳、勁草書房)138頁)

\*51 岡野加穂留2005「総てを単純化する恐ろしい人々—絶えざる警戒こそ自由の代価」『軍縮問題資料』1月号(No.291)16頁

岡野はこうした「単純化」に日本社会全体が被覆しつつある現状を以下のように、

批判する。「かつて、総評と同盟等複数有った労働組合が、『連合』に一本化された。中選挙区が小選挙区に収斂され、多元社会の多元的価値観を無視して多党制をぶち壊し、二大政党と称して「異口同音、の虚構二大政党体制を作り上げつつある。自治体の「道州制」も隠された中央統制権力の強化策だ。「小さな政府」の響きは快い。だが、権限委譲もグラスルート・デモクラシーが徹底しているキリスト教会を精神的な基軸とする基礎的な住民自治体 (parish) が構築されている欧米においては可能だが、日本においては未解決な問題が多すぎる。行政組織の整理・統合・廃止・分権等には、「費用対効果」の論理の手に騙され、国民に隠された落とし穴が沢山掘られている」(同20-21頁)。既定され遮断されてしまった「情報空間」の病理を搞出するものと言えよう。これと関連して、政府が緊急時の「サバイバル指南書」を作成し国内のすべての世帯に配布する方針を固めたことが報じられていたが(読売新聞2004年12月26日)、その狙いは、弾道ミサイル攻撃や生物・化学兵器テロを受けた時の効果的な避難方法などを盛り込み、市民に自ら身を守る知識と自覚を持たせることだという。2005年度の予算においても「テロ対策」絡みの新規予算がかなり認められていたが、その前提であるはずの平和構築への積極的なコミットや日朝関係の改善の外交努力をなおざりにして、有事に対する心構えや、自ら身を守る自覚を持ってと一方的に強制しているのである。

\*52 片山さつき2005「財務省担当主計官からの警鐘 自衛隊にも構造改革が必要だ」『中央公論』1月号:161頁

\*53 Cf.Hecló, Hugo 1974 *The Private Government of Public Money*, University of California Press.

真淵勝は、予算編成過程における官僚の行動を観察した上で、優秀であるとされる主計局の官僚達でさえ、個々の政策については十分な知識を持ち合わせては、知識や情報に依拠する専門家集団ではないことを強調している(真淵勝2004『現代行政分析』(放送大学教育振興会)125-126頁)。

\*54 Hirschman 1991 *The Rhetoric of Reaction: Perversity, Futility, Jeopardy*=1997『反動のレトリック——逆転、無益、危険性』(岩崎稔訳、法政大学出版局)191頁

\*55 坂村健2004『ユビキタス、TRONに出会う』(NTT出版)214頁

\*56 坂村健2004:219頁

この「ベストエフォート」の理念に対して、「全体に対する責任者がおり、性能を保証してくれるシステムの運用理念」は「ギャランティ」と呼ばれる(同219頁)。

\*57 佐野眞一2004『小泉純一郎 血脈の王朝』(文藝春秋)196-197頁

\*58 坂村健は、従来の「公共性の強いシステム」では不確実に対処するには「足かせ」となることを強調している(坂村健2004:164-169頁)。

\*59 北小路隆志が指摘しているように、すでにスピルバーグ監督は『ターミナル』(2004)において、「法の隙間」に落ち込んで「監視社会の空隙に住みついた幽霊」を描いている(『Invitation』2005年1月号:110頁)。

\*60 昭和44年11月に沖縄返還の交渉のために渡米した佐藤栄作首相に対して、ニクソン大統領が当時懸案となっていた日米繊維問題を切り出した際に、佐藤首相は「善処する」と答え、通訳は「I do my best.」と訳したという。大統領は当然のことながら要求が受け入れられたと判断したが、日本政府から何ら具体的な策が提示されず、佐藤は

「嘘つき」であるとの不信感を米国政府に抱かれることになった(失言王認定委員会2000『大失言』(情報センター出版局)247-248頁)。「善処する」のみならず、「前向きに検討(実は拒絶)」「遺憾に思う(謝罪なのに他人事のよう)」「可及的速やかに」などの禅問答のごとき政治家用語も、基本的には重要な情報は言質をとられずに「腹芸」で伝えられるような信頼関係が前提となっているのである(日比野勤2004(b):24頁)。

- \*61 中野不二男2004「科学技術はなぜ失敗するのか」(中公新書ラクレ)243-245頁
- \*62 佐野史郎2004:122頁  
佐野史郎は舞台作家の竹内統一郎との対談においても、ブルトンの『ナジャ』などに言及しつつ、「自分というものが何者であるのか、それは、今、誰と付き合っているのかである。自分で決められることではない。自分が誰かというのは他人が決めることだ」と強調している(同100頁)。
- \*63 松下圭一2004「発題Ⅱ 公共概念の転換と都市型社会」『公共哲学11 自治から考える公共性』(東京大学出版会)45-48頁
- \*64 Zupančič, Alenka 2000=2003:322-323頁(富樫剛「訳者あとがき」)
- \*65 Zupančič, Alenka 2000=2003:323-325頁
- \*66 四方田犬彦2004『心は転がる石のように』(ランダムハウス講談社)172-175頁の語句や表現に若干の変更を加えている。
- \*67 映像表現のみならずメディア全般を考察するにおいて参考になるが、武田徹2004『調べる、伝える、魅せる! 新世代のルポルタージュ指南』(中公新書ラクレ)を参照のこと。
- \*68 特に8と10については、筒井由紀子2004「北朝鮮人道支援の「難しさ」と「対話」」『北朝鮮の人びとと人道支援 市民がつくる共生社会・平和文化』(日本国際ボランティアセンター(JVC)編、明石書店)が参考になる。
- \*69 鴻上尚史2004『ハルシオン・デイズ』「ごあいさつ」(香山リカ2004『生きづらい<私>たち——心に穴があいている』(講談社現代新書)193頁より引用)
- \*70 和田伸一郎2004『存在論的メディア論 ハイデガーとヴィリリオ』(新曜社)97頁
- \*71 情報のデジタル化が推進され、インターネット上に成立した新たな情報空間(=サイバー空間)の構造や特性を理解するための能力を、個人一人ひとりの生き方の問題と重ね合わせて考察したものとして、矢野直明「サイバーリアル・イズム 「サイバーリテラシーと情報倫理」考」(『法学セミナー』2003年8月~2004年8月13回連載)が参考になる。その第9回「監視社会」をどう生きるか(矢野直明2004(d))において、矢野は監視に対する不安への対応策として、「監視を気にしない」生き方という「発想の転換」を提案しているが、自身も述懐しているように、こうした「割り切り」を強制することは、表面上の「無頓着」の背後に「諦観」や「焦り」を醸成することにつながりかねない。
- \*72 前田壘2005「再現、再生、読みかえし」『文学界』2月号を参照。
- \*73 芹沢一也2005『狂気と犯罪——なぜ日本は世界一の精神病国家になったのか』(講談社+α新書)217頁
- \*74 芹沢一也2005:217頁  
芹沢は、精神の病を過剰な意味づけから解放して「普通の病気」にすること(=「狂気」の脱犯罪化)を提唱すべく、「歴史」に閉ざされてきた「訴えの声」や「悲嘆

の声」に耳を傾けるべきことを説いている。

- \*75 河合幹雄2004『安全神話崩壊のパラドックス』(岩波書店)を参照。
- \*76 市野川容孝は、「社会的なもの」を考察する中で、「社会的」という言葉のもつ「平等」という価値を志向する、すぐれて規範的な側面の忘却自体の忘却が帰結する、社会学の脱規範化・脱政治化を激しく批判して、以下のように述べている。「……それが明確な価値を志向する、すぐれて政治的な概念でもあるということ、言い換えれば、人間関係・相互行為・規範一般ではなく、そのうちのある特定のものを他と弁別しながら選び取らせる言葉でもあるということが、平然と見落とされてしまうのである」(市野川容孝2004「社会的なもの」と医療」『現代思想』11月号:100頁)。
- \*77 Mindell, Arnold 2001『紛争の心理学——融合の炎のワーク』(青木聡訳、講談社現代新書)を参照。
- \*78 斎藤美奈子2004『物は言いよう』(平凡社)【心得三六】に「声高」に関する卓抜な分析がある。
- \*79 前田壘2005:331頁
- \*80 Kristeva, Julia 1998 Visions capitales, Réunion des Musées nationaux=2005『斬首の光景』(星望守之・塚本昌則訳、みすず書房)
- \*81 Kristeva1998=2005:1頁  
「実体変化(トランススプスタンション)」とは、「聖餐のパンとぶどう酒がキリストの肉と血に変わる事」である(同1頁)。
- \*82 藤本一勇2005「夢の政治学」『思想』1月号:33頁
- \*83 大澤真幸2005(b)『現実の向こう』(春秋社)34-35頁
- \*84 ただし、そうした「やり直し」の可能性は、本来「相似」という意味であるアナログとは異なり、0と1の数値に置換(=デジタル化)されたユビキタス環境では、微修正操作がきかない複雑大規模な「非連続系」の論理が潜伏しているために、障害故障の影響が波及しないような工夫が必要である。しかし、保守を原則としてユーザー側の自己責任としている現状では、これは容易ならざる課題である。すなわち、アナログとデジタルの差は、ある意味では精度の違いでしかないのだが、ユーザーにとってみれば別の相違があり、「アナログの場合、多少エラーがあっても修正がきく。なぜなら、アナログパターンは自然物と同じく連続しているからである。車のハンドルを切り損なっても、ちょっと戻せばいい。だが、もし車をコンピューターで運転するなら、0が1に一カ所変わっただけで致命的な大事故が起こる可能性もある」(西垣通:朝日新聞2005年1月20日夕刊)。
- \*85 内田樹2005『先生はえらい』(ちくまプリマー新書)173頁